「チーム論述書」 様 式

チーム番号（４）

研究テーマ名　地域の“のこしたい”を未来につなぐ

地域の“のこしたい”を未来につなぐ

１．社会課題とチームの問い

人口減少や高齢化により、地域の存続が危ぶまれる一方、その土地には自然や文化、人の営みなど多くの魅力が残されている。同じ状況下でも、課題を乗り越え、自律的に持続可能な地域へ転換している例も存在する。では、前進できている地域と停滞する地域の違いは何か。地域が自律的に課題を乗り越えるために必要なものは何か。地域が自ら考え行動し続ける力の本質を探ることを、本チームの問いとした。

２．研究の過程

2.1 京町商店街で感じた違和感

来街者数の減少や後継者不足により、営業継続が困難な店舗が増え、にぎわいが低下している京町商店街を対象に、課題抽出を行った。店主一人ひとりは強い想いを持っているものの、全体として方向性が共有されず、力を合わせきれていない印象を受けた。商店街への愛着がある一方、長年の慣例や既存手法に固執する人もおり、未来へ向かう一体感が生まれにくい状況にあった。経験豊富な人材や挑戦意欲のある人々の力を結集できていない現状は「もったいない」と感じ、個々のエネルギーを活かすために何が必要かを深掘りすることにした。

2.2 汗見川の成功事例

自律的に地域を持続可能なものへ転換している事例として、集落活動センター汗見川を訪問した。汗見川地区では、地域活性化の取組みが着実に成果を上げている。その背景には、「川を守りたいという想い」と「地域の将来ビジョン」を住民全体で共有してきた点がある。活動は一部に偏らず、「できる人が、できるときに、できることを」行う無理のない参加体制が築かれている。また、立場や年齢を問わず意見を交わし少数意見も排除しない環境が整い、議論が継続的な改善につながっている。さらに、リーダーを支える調整役の存在が、構想の具体化と実行を後押ししていた。

2.3 仮説

地域活性化が進む地域には、「良くしたい」という内発的な思いを持つ人のアイデアを受け止め、地域全体で共有する仕組みがあると考えられる。対話が不足すると停滞を招きやすいが、心理的安全性が確保された環境では、既存住民も刺激を受け意欲的に関われる。成功地域ではボトムアップで挑戦でき、「とりあえずやってみよう」と背中を押す雰囲気や、自助と共助のバランスが取れているのではないか。さらに、学生など外部人材の視点が、地域資源の新たな価値発見につながるのではないか。

2.4 提案

本提案は、地域が育んできた文化や想いを未来につなぐことを目的とする。個々の力を掛け合わせ、地域を協力と共創の場として再定義する。その過程で、対話を促し合意形成を支える**ファシリテーター**、実現まで共に走る**伴走者**として関わる。外部企業や支援団体とも連携し、地域視点を大切にしながら持続的発展を後押しする。学生は、利害関係の少ない**中立的なファシリテーター／触媒**として、対話の場づくりや想いの可視化を担い、点在する取組みを全体の流れとして共有する役割を果たす。

３．展望

取組みが軌道に乗れば、地域資源や文化に新たな価値が見い出され、自律的な持続的発展が期待できる。対話と協力により相互理解が進み、その効果は周辺地域へも波及する。成功例が横展開されることで、他地域でも主体的な地域づくりが広がっていくことが期待される。一方、真に持続可能な取組みとするためには、新たな価値観や異質性を受容する寛容性が不可欠であり、ファシリテーターが継続的に関与することで対話の停滞や協調の欠如を防止しつつ、誰もが参加可能な取組みへと昇華させていくことも求められる。